

蜜ろうそくのひみつ

ミツバチの巣で作る

蜜ろうそくは、100%ミツバチの巣だけで作るろうそくです。灯芯に巣を巻き付けただけでも、充分きれいなあかりが灯ります。ろうそくのはじまりは、この蜜ろうそくといわれています。



ろうを作るミツバチ

ミツバチは、蜜をたくわえられる防水性の巣を作るために、腹部から「ろう」を分泌し、巣材としています。「蜂ろう」と呼ばれるこのろうを分泌するためには、10倍の量のハチミツを食べなければならないそうです。



このミツバチの巣を精製したものを「蜜ろう」と呼んでいます。

一匹のミツバチが、生涯で集められるハチミツの量は小さなスプーン1杯分ですから、一本の蜜ろうそくには、数えきれないミツバチ達の労力がかかっているといえます。

はみ出た巣の収穫

ミツバチは、春から夏、花がたくさん咲き、家族が増える季節になると、巣箱の中の巣枠の外側やちょっとしたすき間にも、どんどん新しい巣



を作ります。放っておくと、巣箱に巣板がくっついてしまい、作業がしづらくなりますので、見つけるたびに取り除かなければなりません。また、巣穴にたくさんの蜜がたくわえられると、ミツバチは保存のために、ろうで巣穴にふたをしてしまいます。ハチミツ収穫の時は、その「蜜ふた」もナイフで切り取ります。

それら養蜂で仕方なく採れてしまう巣を収穫・精製したものが「蜜ろう」です。

精製(せいせい)

収穫したミツバチの巣は、質が悪くならないように、すぐに精製を行い、不純物を取り除きます。

精製は、たくさんのお湯で溶かし、有機質な汚れを落とし、ろ過器で濾します。冷えれば、汚れた水と蜜ろうが上下に分かれて固まり取り出すことができます。



蜜ろうの色は花粉の色

ミツバチの巣は、季節の花により「色」が違います。それは、ミツバチがろうを作るために食べるハチミツの中に溶け込んでいる花粉の色によるもので、トチの花が咲くとオレンジ色、キハダの花が咲くと黄色の巣に変わります。この天然の色は、蜜ろうの色にも鮮やかに、そのまま現われます。



たった500gの収穫

ハチミツは、一箱あたり一年間で50kg以上の収穫がありますが、蜜ろうはたった500g程しか採れません。ハチ蜜の森キャンドルでは、東北地方で採蜜をなさる養蜂業者の皆さんから蜜ろうを仕入れて蜜ろうそくを製造しています。

蜜ろうそくを作る

ハチ蜜の森キャンドルでは、型抜きをはじめ、糸にろうをかけた後、浸したりして少しずつ太らせる方法など、様々な方法で製作しています。



蜜ろうそくは、油煙が出ず、点灯時間も長く、静かにやさしく灯ります。

食べられるミツバチの巣

蜜ろうは唯一の「食ろう」です。日本ではなじみがありませんが、欧米では巣ごとハチミツを食べる習慣があります。体に良い成分も、



たくさん含まれているそうです。

蜜ろうを使ったお菓子“カヌレ”は有名です。

活躍する蜜ろう

蜜ろうは、安全性や融点の高さ、やわらかい性質から、ろうそくの他にも、さまざまな分野に使われています。口紅やリップクリーム、コールドク



紫雲膏

リームなどの化粧品。座薬や軟こうなどの医療品。ガムや焼菓子などの食品。靴や床、自動車などのワックス類。その他にも模型、染色、油絵の具、クレヨン、印刷、絶縁材、鋳造、グリース、植物の継ぎ木など、私たちの生活に欠かせない多方面の材料に使われています。

古くて新しい歴史

「蜜ろうそく」は、紀元前に使われた最も原始的なろうそくといわれています。日本でのろうそくの始まりも、奈良時代の仏教伝来とともに中国から輸入され使われていた「蜜ろうそく」だそうです。残念なことに、平安時代に中国との交通が途絶え、輸入されなくなってしまいました。国内における蜜ろうの生産は、野生種のニホンミツバチが養蜂には適さない習性ゆえにほとんど行われず、それに変わるものとして漆やハゼの実で作る「木ろうそく」が作られるようになったのです。本格的に蜜ろうの生産ができるようになったのは、明治時代初期にアメリカからセイヨウミツバチが導入されてからでした。しかし同じ頃、コストの安い「パラフィンろうそく(石油系)」が作られるようになり、蜜ろうはあっても、蜜ろうそくは作られなかったのです。

そして昭和の終わりに、養蜂の盛んな朝日連峰の山麓に、日本で初めての蜜ろうそく工房「ハチ蜜の森キャンドル」が誕生しました。

森一番の蜜源樹 トチノキ

広葉樹の深い森には、たくさんの蜜源樹(植物)が自生しています。ただ、収穫できるほどたくさんの蜜を出してくれる蜜源樹は限られています。



その中で、最もおいしいたくさんの蜜を恵んでくれるのがトチノキです。「100年以上のトチノキは、一日に一斗(18ℓ)の蜜を出す」と云われています。湿った水はけのよい場所を好み、沢沿いや川沿いに多く見られます。朝日連峰では、5月中頃にソフトクリームのような花を木一面に咲かせます。秋には、枳餅の原料になる大きな実“とちつぶ”を、たくさん実らせませす。

育てるハチ蜜の森

昭和42年(1967)、当時国が進めていた拡大造林事業による森林伐採により、森から蜜源樹がなくなってしまうことを心配した山形県の養蜂組合は、全国に先がけ植栽をはじめました。雪で倒されたり、枯れたり、苦勞がいりますが、これまで3万本以上の「トチノキ」や「キハダ」の苗を植えてきました。トチノキは、花が咲くのに15年以上、たくさんの蜜を出してくれるようになるには50年はかかるといわれています。

(お願い)

蜜ろうそくのやさしい灯火は、このように豊かな広葉樹の森とミツバチや養蜂業者の苦勞があってこそ生み出される貴重なものです。

ハチ蜜の森キャンドルでは、そのあたり前な蜜ろうの魅力伝えたく顔料も香料も加えずに製作しております。保管は色あせしないよう包装したまま暗い所をお願いします。また、お使いの際は必ず取り扱い説明書をご覧下さり適切な方法で灯して下さるようお願い申し上げます。 代表 安藤竜二

制作 / ハチ蜜の森キャンドル

※無断転載はご遠慮下さい

〒990-1573山形県西村山郡朝日町立木825-3

Tel& Fax 0237-67-3260

メール mitsurou@alto.ocn.ne.jp

ホームページ <http://www.mitsurou.com/>